

スピード・弾力性・技術力・国際化



元 中部電力（株）副社長 志賀 正明

規制緩和の流れの中で、水力、火力、電気設備等の技術基準を性能規定化するとの考え方が示され、事業者として大歓迎でした。そして実際の運用に当たっての解釈に民間規格を引用する仕組みもすばらしいと思いました。

性能規定化はコストダウンのチャンスであると同時に、事業者が自己責任を負うこととなり、確かな技術力が求められます。

以来10年、日本電気技術規格委員会（以下「JESC」という。）は実に多くの規格を次々と審議し、法令への引用要請等を行われました。関根委員長をはじめ、多くの関係者の方々の長年にわたる御労苦に改めて敬意を表する次第です。

この機会に、今後のJESCに期待する事を述べてみます。最も大事なものはスピードではないかと思っております。

新材料、新解析手法、新工法、その他の新技術が次々と出て来る中で、これを迅速かつ慎重に処理して極力早期に運用できるようにすることが、日本の技術進歩、コストダウン、そして国際競争力の強化のために重要です。そのためには、案件をため込まずに、手間はかかりますが、その都度、部分改正を重ねるなどの色々なアプローチを考えてみたらどうでしょうか。要はスピードです。

また、性能規定化の主旨を生かすためにも、規格の数値等に極力幅を持たせて、その考え方を解説し、事業者の弾力的な運用をやり易くする配慮

も必要かと思われます。

当然のことながら、事業者も自己の責任において、性能の維持向上とコストダウンのバランスを達成しなければならず、高度の技術力と判断力が求められます。最近心配されている技術力の低下防止のためにも役立つ筈です。

最後に国際化についても一言触れさせていただきます。

グローバル化した経済の中で、規格の国際化が必須なことは論を待ちませんし、各界で精力的な活動が行われておりますが、例えばIECなどでは、日本は当初から参加しているにも拘らず、殆どが“従”であり、世界標準に“合わせて”来たのが実態かと思えます。これは歴史的に見れば止むを得ないことだったと思いますが、今や日本は技術大国です。日本として受け入れ難いもの、また日本の規格を取り入れてほしいものがあります。

単に相手に合わせるに止まらず、日本の考え方を強く主張して日本発の世界標準をもっと増やしたいものです。

例えば、変電設備の耐震設計は世界的には静的0.5Gであり、日本もかつてはこれに準拠しておりましたが、実際の地震被害の解析結果から、機器の固有周期に近い成分が地震波に多く含まれている場合、異常に振動が増巾されることが実証されたため、0.3G3波共振の動的設計を採用しており、世界標準を上廻る強度となっているケースが

多いと思われます。

これなどは、地震国日本ならではの規定ですから、世界標準として採用してもらってもいいのではないのでしょうか。

欧米諸国は、なかなか強硬ですが、彼等も地震多発国へ輸出する事がある筈ですから、転ばぬ先の杖となるかも知れず、提案する価値が有ると思えますが如何でしょうか。

これはほんの一例に過ぎませんが、この他にも太陽光発電など、日本がトップレベルにある技術について、日本がリードする世界標準をもっと推

進したいものです。

国際的な発言力を高めるためには、単に技術力だけでなく、相手を論破できる確かなディベート力を鍛えることも重要です。

JESCとしては、直接このような活動をする立場には無いかと思いますが、国際化委員会との連携を密にして、次々と案件を持ち込むなど積極的な働きかけをすると良いのではないのでしょうか。

10年の節目を迎えて、JESCが今後さらに意欲的に活動されることを願ってお祝いの言葉といたします。

